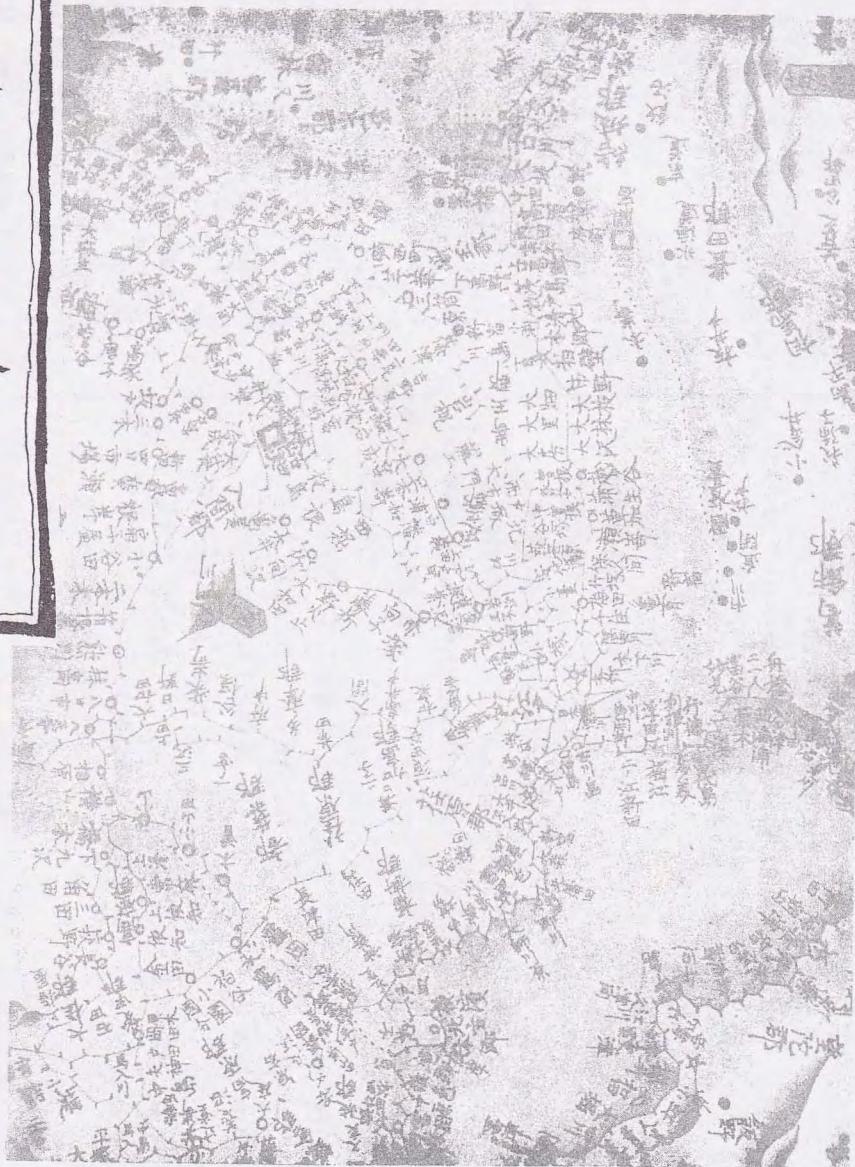


伊能忠敬研究

1000年 第二四号

史料と伊能図



伊能忠敬研究会

目次

(表紙写真解説) 目次

表紙図解説 太鼓谷稻成神社蔵 日本地理測量之図(部分)

津和野市の太鼓谷稻成神社に、津和野藩から幕府天文方に出向していた津和野藩士堀田仁助が、帰国土産として藩主龜井侯に献呈した本図が所蔵されている。

堀田仁助は曆数に長じ寛政五年から曆局に出仕し、文政一〇年まで約三〇年間曆局に勤務した。伊能忠敬が測量を開始する前年に、海路で蝦夷地測量を実施している。

日本地理測量之図は縮尺を伊能小図の「一分の一」の 864,000 分の一とし、日本全体を一枚に描いたものである。最初の版は高橋景保が忠敬の九州測量以前に、幕府の要請で他の資料によつてとりまとめたもので、日本輿地図稿という名前がつけられた。伊能測量完結後修正して日本地理測量之図といふ名前がつけられた。明治初年に日本全図として刊行された図の多くは本図が基礎となつてゐる。

五メートル四方くらいの巨大な日本図で、地図の周辺に里程表、山岳一覧、島嶼一覧などを配し、日本総覧のような形式をとっている。なぜか縮尺二分の一の日本東半部沿海地図とセツトで保存されていることが多い。

ここに掲げたのは江戸を中心とした部分で、測線に沿つて地名を記し、宿駅に○、城下に□を描き、測線の及んでいない地名を●で示している。点線は國の境である。中央に入間山などという地名が見える。(渡辺)

(題字は忠敬の自筆)

エッセイ

NHKお正月時代劇

「四千万歩の男—伊能忠敬」について

坂部さんの手紙

研究ノート(選載)

伊能忠敬の房総沿岸測量 (一)

伊能古文書教室 6 佐原邑河岸一件 (一)

伊能忠敬宛江川英毅書状と伊豆測量 (三)

作品紹介

「蝦夷地測量図」

報告「伊能忠敬と九州展」おわる

地域史料紹介

伊能忠敬の江戸在住日記 (四)

お知らせ

入会案内ほか 裏表紙裏

(裏表紙 英文目次)

注 今回は、連載の対馬藩宗家文書『測量御用記録』を
お休みします。次回に掲載します。

お正月時代劇「四千万歩の男—伊能忠敬」について

付 松平定信と伊能忠敬

渡辺 一郎

台本を整理する

NHK総合テレビで、二世紀初頭の正月三日「正月時代劇（二時間番組）」で伊能忠敬（主演・橋爪 功）をとりあげることは皆さんご承知のとおりです。監修を依頼され台本のチェックから、測量、天測、地図作りの場面構成、セリフ、そして撮影現場の立会いまで約二〇日間お付き合いしましたので感想などを述べてみたいと思います。

お話しがあつたのは八月でした。大変結構なことなので、協力することにして色々意見をチーフ・プロデューサーに提案しました。ところが、台本が出来上がってびっくり。提案は無視され、「四千万歩の男」の面白そうなフィクション部分の物語が、これでもかこれでもかと入っていました。

ほんとうは、そういう「作り話」は一切落としたいのですが、視聴率を稼がなければならない制作者の立場ではそうはいきません。「時代劇のドラマであつて教養番組ではないんですよ。お正月なので楽しくりやつ」と前もつていわっていましたが、正直にいってがつかりしました。

しかし、確かに教養的な内容ばかりでは、関心ある人は別として、多数の人々を二時間も引きつけておくのは難しいでしょう。気を取り直して、フィクションの量を減らす交渉をし、史実部分の脚色は我慢できる程度までに直し、測量、天測、地図作り場面はできるだけ真実

に近づける方針で、真っ赤になるほど手をいれました。
つぎは女性です。女主人公を画面で活躍させないとドラマにはなりません。「今年の大河ドラマはやり過ぎだ」と局では笑っていましたが。そうなると、候補者は第一の妻ミチ、謎の才媛で内妻のお栄と、長女お稲の三人に限られます。「四千万歩の男」の舞台は第二次測量の半ばまでなので、お稲さんは無理。俳優座の「伊能忠敬物語」では女主人公はミチでしたから、ここは、お栄さん（高島礼子）しかないのでしょう。台本ではこれでもかこれでもかと登場します。

地味な地味な忠敬の人生のなかで、ただ一度、艶やかな女性と客分という名目で同棲し「才色兼備の麗人」と高橋至時をうらやましがらせながら、第一次測量のあとで忽然と記録から姿を消します。

伊能忠敬研究会では、四人目の妻で内妻と敬意を表していますが、史実的には殆ど不明ですから、ドラマでは作者の腕の振るいどころで大活躍します。やり過ぎかも知れませんが、忠敬人気に彩りを添える意味でいいだろうと我慢しました。

原作は吉原の「おいらん」の出ということでしたが、あまりひどいので辰巳芸者ということにしました。芸者ですから吉原にも出入りして高橋至時と忠敬を案内するという、とんでもない場面を描きます。

天測では、豪華番組なので忠敬隠宅の観測所をしつかり作つて貰おうと考えました。忠敬伝記では、よく物干し場で星を見ていく絵が描かれますが、これは全くの絵空事です。忠敬が持つっていた観測器具は大谷亮吉『伊能忠敬』に寸法入りで詳しく紹介されていますが、物干し場などには乗らない大型観測器です。特に圭表儀という太陽の日影を測る機器は長さ二丈七尺、高さ一丈三尺もありました。とうぜん観測所は地面の上ということになります。

ところが、地上の観測所では話の筋をすつかり入れ替えなければな

らないので勘弁してくださいよ、ということになつて結局物干台に戻りました。そのかわり中象限儀は実物どおり、圭表儀は寸法を縮めてもいいから、同じ形にとお願いして実現しました。それでも子午線儀は無理でした。忠敬が測量に出かけるために測器に払った費用七〇両。いまのお金にして一千万くらいと思いますが、制作費一億を超えるNHKの大型時代劇で、形だけ同じ機器を作るのが大変だというのです。妙なところで忠敬の執念を感じ入りました。

それからお稲さん。伊能測量のもう一人の女主人公お稲さんは後半の測量を支えた重要人物ですが、第一次測量では出番がありません。残念なのでいちおう、登場だけさせることにしました。江戸店を任せられていた夫の盛右衛門が米相場に失敗して許しを乞う。しかし、忠敬は許さない。離縁する。お稲は追いかけて家を出る。稲も勘当されると、という筋でセリフも考えました。

しかし、ドラマとしては、そのあと落着させる場所が必要です。しかたがないので、第一次測量帰着の場面に子供連れで出迎えて詫びを入れ、忠敬も後悔して許すという筋書きで妥協しました。

事前の打ち合わせでは、せめて将軍上覧の場まではやりましょう、ということにしていましたが、江戸城大広間の再現に、予算がかかり過ぎるというのでこれも落ちてしましました。しかし、最終版伊能図はぜひ映してもらおうと思い、時代は合いませんが、第一次測量のメンバーが覗き込み、やがて現代図に重なるという筋になっています。

そのほか、あれやこれや、つきのようなお願いをしました。

伊能測量の立役者、堀田撰津守が悪役になつていたので、セリフを大分直しました。はじめの方に悪役の感じが残つていますがハッピー エンドになるので我慢して下さい。

脚本家が古い忠敬の本を読んだのか、忠敬は伊能家に奉公していく

婿に直つたような筋書きになつていて、とんでもないと直しましたが、ミチの悪妻振りが少し残りました。

劇中の登場人物で有名人は松平定信（片岡仁左衛門、襲名後始めてのテレビ出演）です。この人も忠敬と同じで小説や映画になりにくい、真面目人間ですが、井上ひさしさんは小説家ですから、推測をふくらませて、どんどん活躍させています。

定信が吉原に火をつける話が出るのです。トイレで忠敬が定信の秘密を立ち聞きし、お茶の計らいで取引ましたが、付け狙われます。時代考証の竹内さん（江戸東京博物館館長）によると、実際にこの頃吉原で火事があった。火付けは大罪だが吉原は特別扱いだということです。それでも火付けはひどいから、黙認くらいにトーンを下げました。定信が忠敬と出逢うなど、正式な場ではありませんが、吉原なら、あり得なくはないだろうとそのままにしました。

少年時代、九十九里で捨て子扱いにされていたという話があつたので、寺子屋に通わせてもらつている形に改めました。

橋爪 功さん

橋爪さんから希望があつて、ロケ地の下見の合間に、仕事で京都滞在中の橋爪さんに逢つて忠敬のお話しをしました。「ちくま新書」の拙著を渡して忠敬の概略と、測量のやり方を説明しましたが、たいへん御熱心で理系の質問を多くいただきました。梵天の垂直はどのようにして確認するのか。三角定規でも持つていたのではないか。杖先羅針を立てる位置と梵天の位置の関係はどうなる。など測量作業を演ずる立場での疑問点をいくつも指摘されました。

撮影現場でも、坂道の勾配を測るとき、小象限儀の見通し線は梵天のどこを狙うのかといわれました。厳密には目の位置と等高の標的を

立たねばならないのですが、大谷氏は「簡略して相手の目を目標にしたらしい」といつていて、第一次測量では途中を急いでいたから、梵天持ちの目を狙つていいでしょう。といった具合である。

気安くて、理解が早い人ですが、測量隊の俳優陣とも冗談をいながら、よくまとめて本物の忠敬さんもこんな人だったかな、という気がしました。加藤忠敬も良かつたが、橋爪忠敬もなかなかのものだという感じです。

口ヶ先で

口ヶ先は福山の「みろくの里」と「松竹京都」および丹後半島の「間人(たいざ)海岸」で行われました。まず下見で、筆者も、監督、カメラマン、美術、照明、など十数人のスタッフと同行しました。現場で構図、設備などを決めてゆきます。

口ヶ前日、ホテルにチェックイン。現場の準備状況を確認した上、ホテルで俳優に測量器具の説明。宍戸(隼太役)さんに象限儀を動かしてもらい、大体の所作をきめました。

圭表儀はもう少し大きい物を期待していたのですが、物干し式観測場・推歩橋に乗せるため、五分の一になってしましました。しかし、象限儀は大谷本の図面どおりに原寸のものが出来ました。分解したとしても、こんな大きな物がよく馬の背で運べたと感心しています。

圭表儀を扱うのは橋爪さんなので、設置方法、動き、日影をどう写す、など理系のやりとりがありました。

口ヶ当日は、俳優さんは支度があるから先発。本隊のマイクロバスで現地に着くと、江戸の町ができていきました。下見のとき、これで撮影ができるのかと思った雑然とした廃屋の町に、千住の木戸が立ち、家々に暖簾が下げられ、日除けが出て、水桶、大八車、米俵、屋台が置かれ、エキストラの武士、人足、和服の女、子供が歩き回り町にな

っていました。

一角には吉原の格子付きの遊郭が半分くらいできかつており、提灯など吊るしていました。翌日には吉原の大門まで完成して驚きました。これら作業のため道具、小道具の作業車、電源車、録画車、要員車など十数台がならび、食事ができるテントの軽食堂もできて人口百二十人の町になっていました。

坂道の勾配測定では、お捨が何故そんなことをしているのだと邪魔にはいり、忠敬が一応説明しますが、しきれなくなつて、お榮!と呼び、学者・お榮が説明を始めます。

岩場の測量では、長助と吉助が攀じ登つて梵天を立てる、忠敬が方位を測る、秀藏が間縄を伸ばす場面をおさめました。嵐のあとの日本海の大波がバックになつて迫力あるシーンとなりました。

大雨をついての測量はやつていいといつたら、強風下の測量場面を作ることになりました。大型送風機で篠をゆすり、ヘリコプターで風を起こし、砂塵のかわりにコーンスターを、ばさばさ撒いて風塵をつくり、橋爪忠敬と宍戸隼太は強風をついて歩測をしました。

まだまだ、ロケは続き、スタジオ撮影もありますが、あとはテレビを御覧下さい。視聴率目標一五%です。大いに宣伝をしていただくようお願いします。

松平定信と伊能測量

伊能測量を支えた重要人物は高橋至時のほかに幕府若年寄・堀田攝津守と仙台藩医・桑原隆朝がいることは、研究会員なら安藤由紀子氏の記事などでおなじみであるが、一般の人達には分かりません。

松平定信、堀田攝津守、桑原隆朝と忠敬の全国測量が、何らかの形でつながっていることは容易に想像が付くのですが、史料で説明しろ

といわれるとなかなか困難です。状況証拠はあるのですが、直接証拠が見当たらないのです。井上ひさしは作家だから、直感で自由に定信を登場させていますが、どうしたらよいのかを迷いました。

はじめは定信を取り上げないこととし、堀田攝津守以下で構成したらと考えたのですが、何しろ堀田攝津守では普通の人に偉さが分かれません。それに対し松平定信は歴史の本には必ず出てくる著名人です。攝津守のバックに、老中を辞任したとはい、井伊家などと同格の溜の間詰で、老中評議にも出席を許されている松平定信がいたということは、伊能測量が徹底して行われた説明としてはまことに分かりやすい。測量当時の老中首座は、定信が登用した腹心の松平伊豆守信明でした。方向性は違つていいし、ドラマですから、史料的説明はあとからにして御登場を願つた次第です。定信役には片岡仁左衛門さんという大物歌舞伎役者が出演して全体を引き立ててくれました。

本当に松平定信が伊能測量にどのくらい、からんでいたかは大きく興味が持たれます。調査中ですが、分かったことだけを書きます。

一、定信は世子の頃から親しく人材を求めて交わっていた。戸田氏教、堀田正敦（攝津守）は、そのメンバーである。

一、定信には文才があり、老中辞職後、文事の会を主催し各界の名士と交流した。諸侯では堀田正敦、松浦清（平戸藩主）などが参加していた。終始定信の身辺にいたのは谷文兆で、伊豆沿岸巡視でも連れて歩き、鶴岡八幡宮で宝物を写させている。（白河楽翁公とその時代 三上參次、創元社、日本文化名著選 昭和15年）

一、定信の退職は円満退職であつた。徳川一五代史には「政治向きのこと、大小となく、定信在職の時のごとく執り行うべき旨、諸役人に命を伝う」とある。（近世日本国民史 德富蘇峰）

一、堀田正敦は仙台藩主伊達宗村の八男であるが、部屋住みのころ、旗本でもよいから出仕したいと願つていて。定信の世話で、近江の堅田藩一万石の養子になり、襲封したのち、寛政二年五月、若年寄となり天保四年まで若年寄を勤めた。（江戸時代史6 三上參次 学術文庫本 昭和52年）

正敦は襲封するとすぐ大番頭に召し出されます。大番頭は一万石位の大名役ですが正敦の大番頭は好評でした。（よしの草紙）この役を一年間勤めると若年寄に抜擢され、以後四三年間、老衰で致仕するまで若年寄を勤めます。定信の影響が大きい間は、強力な引き立てがあつたに違いありません。定信は白河藩主のうちから人材を求めて交流しており、その中に伊能測量の先触れ発令者として名前が出てくる牧野備前守、戸田采女正、松平伊豆守信明がいました。

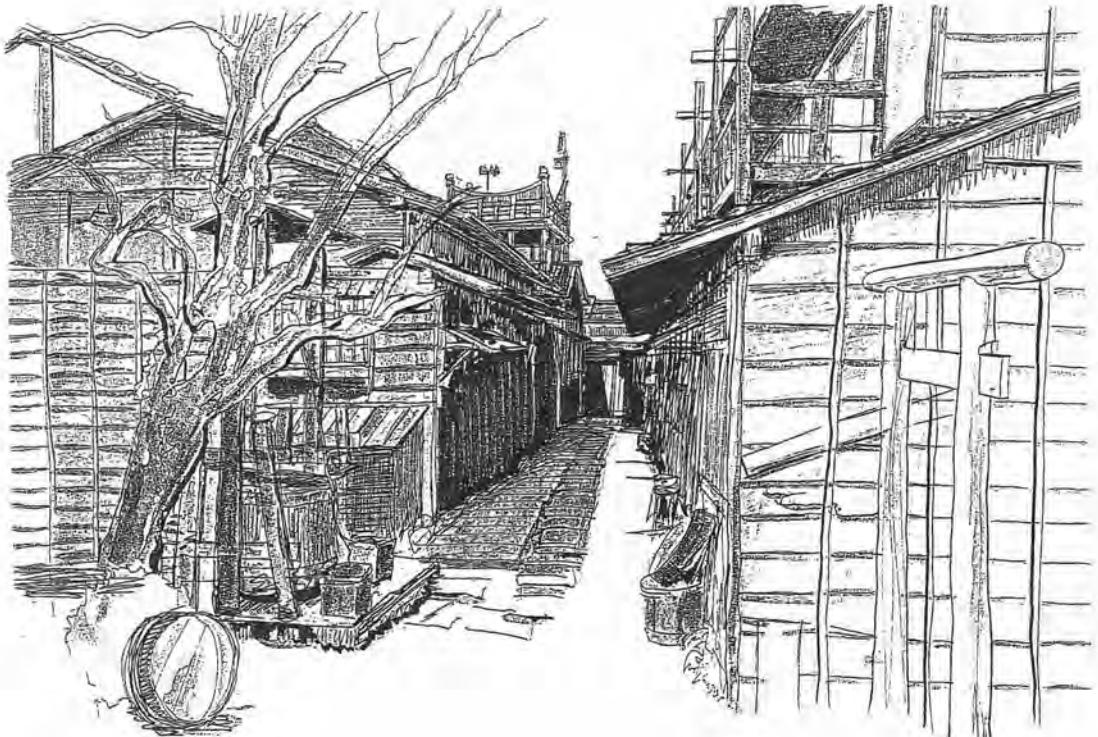
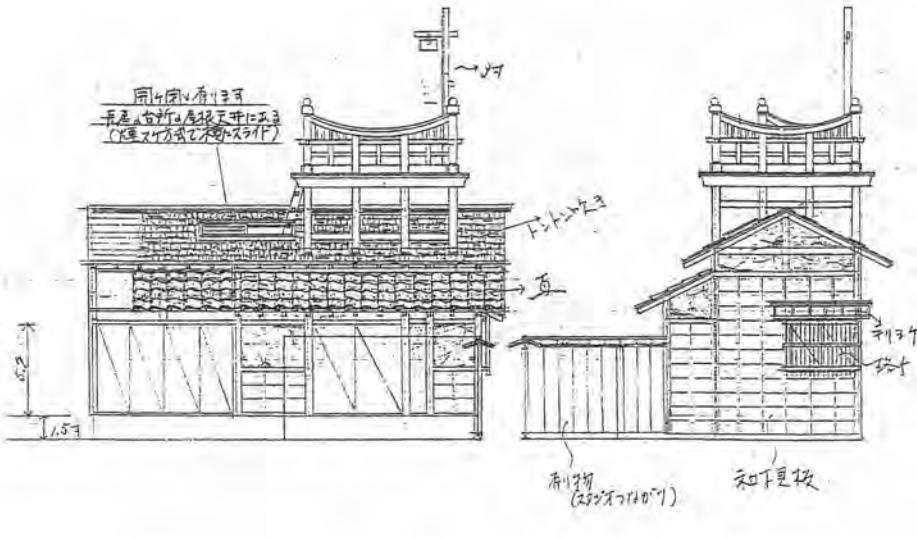
定信が老中首座に就任し将軍補佐役となると、彼等はつぎつぎに閥僚に任命されます。定信失脚後は、老中首座を三河吉田藩主・松平信明が引き継ぎ、約一五年間政務を見ます。閥僚はすべて引き継がれ、腹心の松平信明が老中首座ですから、すべての政治情報は定信に入つていたとみてよいでしょう。

一、將軍吉宗が企画して果たせなかつた改暦を定信が実施しようとした。寛政の改暦は定信の発意である。（日本の天文学 中山茂 二〇〇〇、六、一、朝日文庫）（日本歴史大系3近世 五四七頁 厚谷 山川出版 一九八八）

そうすると、高橋至時を呼び出したのも実質的には松平定信の指示ということになります。伊能測量との因縁はさらに深まります。

忠敬は黒江町の幸七店に住んでいたという。先方に推歩楼が見える。

ロケ場所の一つ、松竹京都撮影所に設けられた忠敬隠宅の天文台・推歩楼の図面と外観のスケッチです。撮影が終われば取り壊されます。が、普通の家を建てるのと同じように図面を書いて、大工さんの手でつくられました。



伊能忠敬の房総沿岸測量 (一)

渡辺 孝雄

第三日 檜見川から五井まで (千葉市・市原市)

六月二十一日 この日は晴天で、明け六つ半前 (午前七時前)

に検見川の宿を出発している。稻毛村 (一六四軒) 黒砂村 (二五軒) 登戸 (一五〇軒) 寒川村 (三七五軒、駅場、名主市左衛門) を通り、

都川を渡っているが、伊能中図をみると、測量隊の道筋は河口を渡つたのではなく、少し上流に迂回して橋を渡つたらしい。江戸中期の延享年間の記録によるところの板橋は長さ十四間・幅二間と記されている。

千葉村新田・後田方入合 (二二〇軒余) 今井村 (六八軒)

泉木村 (六六軒、駅場) 曽我野村 (六四〇軒余、駅場) 生實新田 (一一〇〇軒余)

濱野村 (本行寺門前三六軒、御朱印一〇石) 村田村 (八一軒)

国界 (上総国市原郡に入る) 八幡村 (三八二軒・一

五二三人、駅場、一五〇石八幡宮領、市原市)。伊能中図では八幡村

に神社の印があり、八幡神社の所在を示している。(写真1) 五所村

(九五軒・四五〇人) 金杉濱村 (二軒) 君塚村 (六八軒) を経て、

五井村 (六四〇軒、有馬備後守陣屋あり) に八つ頃 (午後二時頃) に

到着した。名主の甚五左衛門宅に宿泊している。この日の検見川村か

ら五井村までの測量距離は、五里二町三八間 (一九七八七・一六六)¹

である。夜間雲間のなかで天体観測を行い、三十五度三〇分三〇秒であつた。

幕末の慶応四年閏四月に、官軍と戦うために房総に逃れて来た幕府軍の一隊は、この中島甚五左衛門家に一時本陣を置いている。前の五

井小学校は、名主の甚五左衛門屋敷跡に建てられたという。区画整理により、今は商店街となつてゐるが、その地はJR内房線の五井駅に間近い。

八幡宿より内陸に約四キロほど入った所に、久々津 (市原市) という地区がある。その板倉清一家に、伊能忠敬の書という額が伝えられている。(写真2) 「勤僕慈惠」とあり、脇に「為板倉君 東河」とある。東河は忠敬の号である。板倉家の先祖が名主をしていた時に忠敬が泊まり、街道の測量の案内をし、その礼としてこの書を貰つたという。(「上総市原」第七号一四四頁) 忠敬の書については、日記など細かい文字以外に余り知識がないため、この書の真偽については何ともいえない。しかし、「勤僕慈惠」という語句はいかにも忠敬らしいものである。

第四日 五井から木更津まで (市原市・木更津市)

六月二十二日 朝より晴れ、六つ半後 (午前七時過) に宿を出発している。忠敬は五井村について「五井村ハ海へ遠し」と記している。

五井村の村明細帳には「居村から浦迄の道のり十町程」とあり、海ま

では約一キロほど離れていた。岩崎新田 (七五軒) 玉前新田 (一三〇軒)

松ヶ島村 (五五軒) 青柳村 (一八四軒) 今津朝山村 姉崎村 (四〇一軒、名主新兵衛・五郎兵衛) 埼津村 (一六〇軒) (上

総国望陀郡に入る) 代宿村 (六四軒、袖ヶ浦市) 久保田村 (一二〇軒) 藏波村 (一六八軒) 奈良輪村 (一六二軒) 牛込村 (八〇軒、木更津市) を経て、七つ頃 (午後四時頃) に中島村 (二七二軒、木更津市) に到着した。宿は名主の惣七郎宅であつた。この日の宿泊予定地は木更津町であつたが、測量が予定通りに進まず、きゅうきよ触れを出して中島村泊まりになつたのである。なお牛込村と中島村の

境で富士山の方位を測っている。この日の五井村から中島村までの測

主の金綱惣七郎家は、当時は来迎寺の門前近くにあったという。明治年間に、金綱家は、木更津市菅生に移転した。

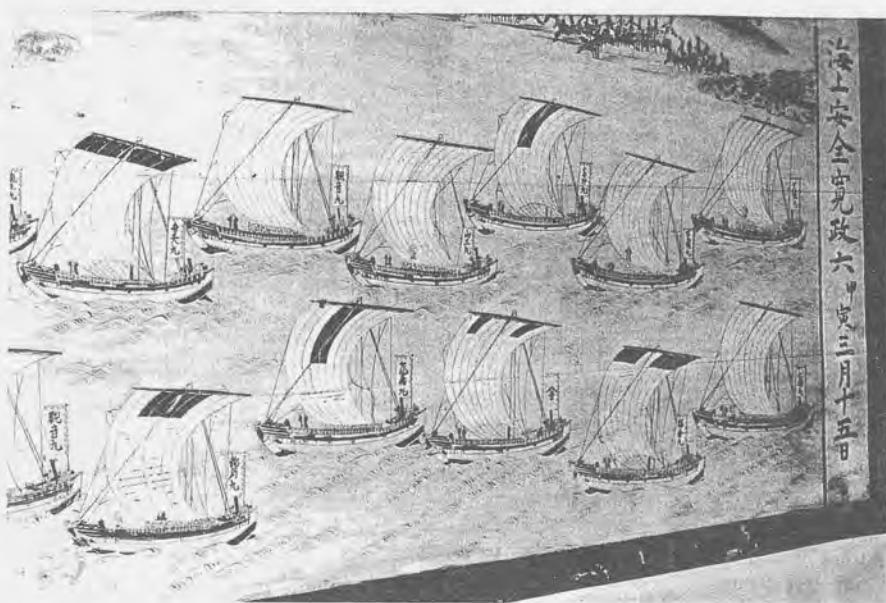


写真1 八幡浦の五大力船の絵馬 (寛政6年奉納 飯香岡八幡宮蔵)

量距離は、五里八町五間（二〇三八一・一尺）であった。夜間は晴れており、夜間の天体観測の結果は、三五度二五分三〇秒であった。名



写真2 板倉家に伝わる「勤儉慈恵」の書

(縦32.5cm 横135cm)

第五日 中島から木更津まで（木更津市）
六月二十三日 六つ半前（午前七時前）に宿を出発している。この日は朝より晴れしており、久津間新田（八一軒）久津間村（六五軒）江川村（七六軒）中里村（三五軒）吾妻村（一四〇軒）と測り、九つ前（正午前）に木更津町（九四三軒、名主は八左衛門・善五郎・治左衛門、木更津市）に着いた。

この日の中島村から木更津までの測量距離は、二里一町五十八間（八〇一四・五六尺）であった。夜間の天体観測では、三五度二三分三〇秒であった。

秒であった。

なお伊能中図には木更津から富士山への方位線が記入されており、木更津からの方位確認を行っている。

当時木更津湊は、五大力船・押送船による江戸への物資輸送の港であり、木更津と江戸日本橋の木更津河岸の間は、木更津船とよばれた定期船が運行され、西上総の交通の拠点として賑わっていた。忠敬一行は、木更津の名主八左衛門宅に宿泊している。名主の石川八左衛門家は、元禄年間も名主役を勤め、寛政年間以降明治初めまで五大力船の船持でもあった。文政八年（一八二五）に八剣八幡神社に奉納された狛犬の台座銘にもその名前が

ある。雨十の号で俳諧もたしなみ一茶との交流もあり、一茶は木更津にくると、八左衛門家に泊まっている。家のあつた場所は、現在の木更津郵便局の地であった。

この日の二十三日付けで、忠敬は師の高橋至時宛てに手紙を出したらしい。七月一日付けの至時の返書が、伊能忠敬記念館に残っている。一部を要約してみる。

先月二十三日付けの手紙は、二十七日に手元に届きました。炎暑の中お元気のこと何よりのことです。測量の距離が予想より伸びているとのこと、又中川から先は薄い原や小竹で測量が手間取つていているとのこと、困難を察しました。仕方なく行徳泊まりとなつた由、御手紙によつても難渋をお察しします。

量程車は、土地の乾き具合により違ひが出る由、もつともなことです。こちらで引き試しても、土地が堅い所と、塵芥などごみが多い所では必ず距離が違います。そのため間棹や間繩も用いて比べて測つていてる由、この点は時々試してみる必要があります。測量は大変な仕事です。定まつた場所での測量で安心して使用している器具でも、時々点検しなくてはなりませんが、一日に数里を移動し、乾湿・天候がかわりますので、注意して測量するよう祈つています。特に今回は一度の里数を精密に測る必要があり、大切な測量です。後世になつてもその数値が翻ることのないようになることを願つています。各地の大きな山を測量しているのないこと、そのお心掛けにて最上の地図が出来ると思ひます。

(後略)※

忠敬の房総測量苦労に対する勞いとともに、忠敬の測量の方法につ

いてのアドバイスや激励が込められた手紙である。またこの手紙で測量隊が、量程車を使用していたことがわかる。

※「高橋至時書簡」(上原久 小野文雄 広瀬秀雄編『天文曆学諸家書簡集』所収、書簡(二十一)

第六日 木更津から金谷まで(木更津市・富津市)

六月二十四日 この日は晴れており、六つ半前(午前七時前)に宿を出発している。貝渕村(六五軒) 櫻井村(二八三軒)(周准郡に入る) 小濱村(五七軒) 畑沢村(八八軒) 坂田村(七三軒) 大和田村(三三軒) 人見村(一〇九軒)と測量した。人見村の項に「村に妙見あり登山、所々測」と測量日記に記してあり、一行は妙見社頂に登り、ここから富士山の方位を測つている。この山は海で働く漁師たちの目印となつていた。この妙見社が現在の人見神社である。大堀村(一五一軒・富津市)から青木村(一一五軒)に入ると、飯野藩(保科氏一万石)陣屋の代官手代吉田又兵衛が測量隊に挨拶に出ていく。西川村(七五軒)で富士山の方位を測り、新井村(四四軒)を経て、富津岬の先端まで測量し、八つ半(午後三時頃)に富津村(四五〇軒・二五五〇人)に到着した。宿は名主嘉右衛門宅である。この日の木更津村から富津村までの測量距離は、三里二四町五〇間(一四四〇七尺)であった。夜間の天体観測では三十五度一八分であった。忠敬の泊まつた嘉右衛門家は、現在の織本哲郎家で、富津村の名主をつとめ、嘉右衛門を名乗つていた。織本家でよく知られた人としては、小林一茶と交流のあつた俳人織本花嬌(文化七年没)がいる。花嬌は七代目嘉右衛門(寛政六年没)の妻であつた。忠敬が宿泊した時の当主は八代目嘉右衛門の時ということになる。

第七日 富津から湊まで (富津市)

六月二十五日 この日は朝より曇りで、六つ半前 (午前七時前) に出发したが、途中で雨が降りだしている。川名村 (七八軒) 篠部村 (七五軒、海は川名村と入会) (上總国天羽郡に入る) 大和田村 (五一軒) 岩瀬村 (七五軒) 小久保村 (二八四軒) 大坪村 (四二軒) 八幡村 (八八軒) を経て、湊村 (二〇〇軒、九六〇人) には、八つ半 (午後三時) に到着した。宿は五郎右衛門宅であった。湊村でも富士山の方位を測っている。この日の富津村から湊村までの測量距離は、四里一一町一〇間 (一六八一七・二尺) であった。夜間の天体観測では三十五度一三分であった。宿には百首村役人が挨拶に来ている。この日泊まつた五郎右衛門宅の場所については、現在確認できていない。

第八日 湊から金谷まで (富津市から鋸南町)

六月二十六日 朝より晴れしており、この日も六つ半前 (午前七時前) に出発している。百首村 (四九〇軒、二四九五人) 萩生村 (一四八軒) で富士山の方位を測り、金谷村 (四二七軒) に八つ半後 (午後三時過) に到着した。宿は名主四郎右衛門宅である。この日の湊村から金谷村までの測量距離は、二里一四町五九間 (九四三三・三八尺) であつた。夜間の天体観測では三十五度一三分であった。宿に保田町・大帷衣村・吉浜村・大六村の村役人が挨拶に出ていた。宿となつた四郎右衛門家は、代々金谷村の名主をつとめていた。現在の鈴木土郎家である。幕府の巡見使が房総を巡回する時の宿をつとめる家でもあつた。伊能中図には、この金谷から富士山の方位線が引かれている。

前七時頃) に宿を出て、安房国平郡に入り、元名村 (九七軒・六二四人、鋸南町) 本郷村 (保田町と記す、二七四軒、一四一八人、御朱印一五石日本寺) 大帷衣村 (二二九軒) と測り、九つ後 (正午過) に吉浜村 (九三軒、四五〇人、御朱印五〇石余 妙本寺) に到着している。宿は吉浜村名主の久右衛門宅であった。日記には元名村の項に「日本寺御朱印十五石余、日本寺を保田村と覚る相違なり、元名村なり」と記している。伊能中図をみると、吉浜村から大六村にかけては、

第九日 金谷から吉浜まで (鋸南町)
六月二十七日 この日は曇り少し晴れの天気であった。六つ半 (午



海岸から離れ巡回して測量を行つてゐる。この日の金谷村から吉浜村までの測量距離は、一里二三町一三間（五三四〇・六六尺）であつた。夜間の天体観測では吉浜村の緯度は三五度八分であつた。久右衛門家は、寛政年間から享和年間にかけて吉浜村の名主をつとめ、その場所は現在の保田漁業組合事務所の地にあつたといふ。忠敬の記録に地震に關したものがある。「四月十四日至十五日房州平郡より上総地震至三十余度、土蔵小損、大震三四度、往古ノ大地震より九十九年になる」と云ふと、上総から安房国にかけてかなり大きな地震があつたことを伝えている。忠敬自身がこの地震を体験したのは、三浦半島の上官田村（三浦市）に泊まつた四月十五日の早朝のことであつた。四月十五日の日記には、「朝七つ半頃大地震」と記している。

安房国に入り、地元の人々の話をもとに、地震当時の様子についてメモしたものと思われる。往古ノ大地震より九十九年というのは、元禄十六年（一七〇三）十一月二十三日に起つた元禄地震のことを指している。地震のあとに発生した津波により、上総国・安房国での死者は三四〇人余・漬家八四〇軒余などの大被害が発生した。安房国の海岸線も隆起と沈降による変動があり、津波被害の多かつた吉浜村周辺の人々にとつては、元禄地震はなお強烈な思い出になつていたものと思われる。

第一〇日 吉浜から勝山まで（鋸南町・富浦町）

六月二十八日 この日の天候は曇りで、忠敬らは六つ半（午前七時）に宿を出発した。元名村に立寄り、村役人の案内で鋸山へ登り、高所からの方位を測定している。伊能中図には鋸山から富士山の方位線が記されている。日本寺で休息し、この時に見せてもらつたものについて「保田村日本寺和尚 イキリス暦一二枚を得テ珍藏ス」と忠敬は書いている（忠敬先生日記一二）。また算用数字で「一七九五」と横

に書き、「一千 七百 九十 五年」とその読み方の注記をしている。更に「MAY」とアルファベットを書き、その脇に「ム ア エイ」と読みをいれ、「五月ノコト」と注記している。イギリス暦については、あとでまた触れるが、忠敬の注記から、英語のカレンダーと理解してよいと思われる。

それより引き帰して大六村（七七軒・三五七人）竜島村（一五〇軒・六七五人）を経て、八つ後（午後二時過）に勝山村（三〇一軒、鋸南町）に到着した。勝山村でも富士山の方位を測つてゐる。勝山村には勝山藩酒井氏一万二千石の陣屋が置かれていた。忠敬たちは勝山村の名主又右衛門家に泊まつてゐる。この日の吉浜村から勝山村迄の測量距離は、一里三〇間（三九五四・六尺）であつた。夜間の天体観測では、三十五度六分三〇秒であつた。宿に岩井袋村・久枝村・下佐久間村の村役人が挨拶に出でてゐる。宿の名主平井又右衛門家は、寛永年間に勝山が佐倉藩領になつた時に、勝山に移り住み、酒造の元請役となつた家柄である。日記には又右衛門について「造酒を業とする」と注記している。酒造りは忠敬も行い、佐原の伊能家の主要な商売の一部門であつた。平井家は、戦後館山市に移転している。

第一一日 勝山から那古まで（鋸南町・富浦町）

六月二十九日 朝六つ半後（午前七時頃）に勝山村を出発している。

伊能中図によると、勝山村から岩井袋村にかけてはかなり海岸から離れて巡回測量をしているが、伊能大図によると、険しい海岸線にもかかわらず、測量可能な場所については、岩井袋村側から岬先端部分に向かつて測量している。岩井袋村（一〇四軒・五四〇人）久枝村（一三五軒・七三四人・富山町）不入斗村（一九四軒）小浦村（九八軒）南無谷村（一七四軒・富浦町）で富士山の方位を測り、坂之下

村（七九軒）を経て、岡本村（二二二軒、富浦町）には七つ後（午後四時過）に到着した。宿は淨土宗西方寺であった。童島村の名主池貝庄右衛門は、測量隊を小浦村まで見送っている。この日、岩井袋村等の村々では、海辺に帆幕を張つて休所を設け、測量隊にお茶の接待をしている。房総半島の測量で、測量隊への接待の記録は、ここだけである。

夜間の天体観測について、忠敬は寺の木々が覆い繁つているため、天体観測が出来なかつたと書いている。現在の西方寺は国道に面した町中の寺であり、かつて木々が生い茂つていたことを想像することは難しい。宿には多田良・船形・川名・那古の各村役人が挨拶に出てゐる。なお勝山村から岡本村までの測量距離については、伊能中図の凡例や「大日本沿海実測録」に記されていない。

第二日 岡本から那古まで（富浦町～館山市）

七月一日 早朝の午前六時過ぎに大地震があつた。測量隊は六時半（午前七時過）に岡本村を出発している。この日は晴れたり曇つたりの天候であつた。多田良村（一五一軒） 船形村（五〇〇軒、館山市） 川名村（九三軒）と測り、那古村（二二九軒、那古寺朱印高一〇九石余）に七つ頃（午後四時頃）に着いている。多々良村の海岸線については、「この辺の海辺は岩石が多く大難所である」と注記があり、測量に手間取つた様子がうかがえる。伊能中図には大房岬の先端から伊豆の天城山への方位線が描かれている。この日の宿は那古觀音（那古寺）であった。ここは坂東三十三所の札納所で、寺領一〇九石をもち、那古村の戸数二二九軒の内、百軒は寺領の百姓であつた。六月二九日・七月一日の二日分の測量距離（勝山村から那古村まで）は、四里九町一〇間（一六五九九・二五）である。夜間の天体観測では三

五度一分三〇秒であつた。この日、正木村・湊村・長須賀村・館山・洲崎村・多田良村・岡本村・船方村・川名村の村役人が挨拶に出てい、る。安房国での村役人の挨拶の記録は、他の地域に比べて多い。

忠敬は安房国内でのイギリス暦に関する話題をメモしている。

腰越村（館山市）の延命寺（真言宗）から、領主の北条藩主水野壹岐守に差し上げたイギリス暦について、その出所を藩で取調べた。下真倉村の長泉寺（淨土宗）、同村太七、同村平吉、伊戸村の藤四郎と、次々と前の持ち主の名前をたどり、藤四郎に呼び出しがかかり、取調べがおこなわれたというのである。また次のようなメモを忠敬は書いている。「寛政八丙辰十月中旬房州長狭郡川下浦より二里ホト沖へ蛮船來ル、則イギリス船ノ漂流ナリ」。寛政八年（一七九六）は忠敬の測量より五年前のことである。日本寺で忠敬が見たイギリス暦は、「一七九五」とあり、この漂流船にあつたイギリス暦が、安房国内にもたらされていたのかも知れない。先に触れた七月二日付けの高橋至時から旅先の忠敬宛ての手紙のなかに「お願ひしてありましたイギリス暦は手に入りましたでしょうか。もし手に入つたら飛脚にて送つて下さい」とあり、房州でイギリス暦が手に入る可能性のあるような依頼の仕方をしているのである。房州にイギリス暦があるらしいとの噂は、江戸まで伝わっていたようである。（この項つづく）

おめでとう！

●伊能ウオーカー五〇回参加記念メダルを松江で川上さん、鳥取で土肥さんが受賞されました。おめでとうございます。

活動予定の変更

●本年度に予定していた研究発表会（二二号に掲載）は諸事情により延期します。御了承ください。

坂部さんの手紙

伊能 陽子

つた方がいいのではないかと、当然の返事もあつたが、殆どの方が私の唐突な「ひらめき」に賛成して下さつた。

福岡発十七時の飛行機で帰途についた私は、軽い興奮と安堵感で窓の外に目を泳がせていた。伊能ウォーカー関連の講演会で、多少の責任を果たしてのあれこれが、脈絡もなく浮かんでは消えていった。

白い雲がゆっくりと眼下を移動して行くこの時間帯の空からの眺めは私の目には珍しく映り、光の矢が動く様子はまだ美しいとしか言いようがなかつた。そのとき突然、雲の切れ間から海の色と緑の海岸線が現れた。何処だろうか。毎度のことながら、忠敬先生に見せてあげたいと思つた。四国？ 窓に額をくつつけるようにして見ているうちに、また視界は雲に遮られてしまつた。

—そうだ、坂部さんの手紙を福江に持つていこう—

どうしてその時、そう思つたのか、いま考へても不思議でならない。とにかく私の頭の中は、坂部さんの手紙の事で一杯になつていて。

帰宅した私は、夫に福岡での報告を済ませ「今度福江に行くとき、坂部さんの手紙を寄贈したらと思うんだけど、どうかしら。」と言つた。彼は「え？」と驚いた様子で私の顔を見、考へていたようだが「うん、いいだろ。」と答えが返つて來た。これで、決まり。

まずは安藤さん、坂部貞兵衛書簡を世に出してくれた人に私の思いを伝えねばと、受話器を取る。

甥（八代目当主）と一人の姉も同意してくれた。それから何人かの意見を聞いた。専門的には資料は一か所におくべき、やはり佐原にあ

殆どが、千葉県佐原市の「伊能忠敬記念館」に収められ保存されている。これは遺品の散逸と破損を恐れ、また後学の人々の研究のためにと、両親（忠敬から六代目）が国と県と市の協力による記念館が建つたときに、寄贈したからである。昭和三六年のことであり、現在は平成十年に完成した新しい記念館に移され、多くの人を迎えている。

また、遺品とともに史跡に指定されている忠敬旧宅を寄贈した際に、三百年前の埃と一緒に、記念館に収められなかつた反古やガラクタが、両親や私たちの住む世田谷の家に運ばれて來た。その反古を整理する役目が回つてくるなどと、当時の私は思つてもいなかつたことであつた。

世田谷伊能家文書として、夫・洋と佐原小学校の同級生であり、元国会図書館勤務で古文書のペテラン、願つてもない助つ人である安藤由紀子さんの協力を得、その反古の整理を始めたのが十二年前のことであった。ある日、私たちは、かなり乱雑な反古の山の中から、紙縋りで括られた一束の書状を拾い出し、読み始めた。坂部さんとの出会いである。

坂部貞兵衛は、八年間も、忠敬の右腕として測量隊をまとめ、絶大な信頼を得ていた。あの忠敬を、時には諫めたり、励ましたりした人である。福江島で客死したのが四三才であつた。手紙の文字をなぞつて読むうちに誠実な人柄が偲ばれ、すつかり坂部さんのファンになつてしまつた。

古文書も歴史にも縁のなかつた私は、好奇心と感情移入が中心とい

う素人である。整理のため、文書を一枚一枚手に取り上げるたびに、いつどこで、誰がどんな思いでこれを書いたのだろうと、二百年前の紙をそつと撫ぜてしまう。そこに込められた何かが、伝わってきはないかと。

「伊能ウオーク」の計画を耳にした当初、私には全くイメージが掴めず、何がどうなるのか見当もつかなかつた。二百年前の測量隊の足跡を追い、二年がかりで歩いて日本の沿岸を一周しようという、信じられないような計画に参加する本部隊のメンバーが決まり、昨年一月に東京深川出発を見送つたあと、それでも、早春の房総半島を皮切りに、私はいつの間にか本部隊を追いかけて、各地を飛んで回るようになつた。

伊能ウオーカーに参加して私自身が得たものは数え切れないほど沢山

ある。歩くということを始め、多くの人との出会い、その地の風景、食べ物、言葉などの個性豊かな面白さは勿論だが、各地に故郷のヒローが大切に愛され、生き続けていることを実感したのも、そのひとつである。その場所に立ち、そこに生まれ育つた人々に会つて話を聞くと、改めてその故郷で守られている主人公が、浮かび上がつてくるような気がした。そしてまた、忠敬の「測量日記」もその地の人々が読んでこそ、深く理解が出来るのだとつくづく感じた。故郷を愛する方々の熱情は素晴らしい、強い。

先祖の残したものを見守り伝えるということは、とても大変なことである。時代の移り変わり、価値観の変化、そして受け継ぐ者の考え方で、遺品は大切に保存されたり、消滅したりする。伊能ウオーカーのお陰で久々に再会した松山の友人が、幼い頃、父親が古い蔵の中の文書

や器物を燃やしていた炎の色が、忘れられないと話すのを聞き、同席の郷土史家とともに大きなため息をついてしまつた。彼女の家は、大庄屋であつたから、測量隊受け入れの記録があつたに違いないのだ。

祖母（五代目）は、旧宅で生まれ八十八才の天寿を全うするまで、忠敬遺品を守り、長年にわたり毎日のように訪れる大勢の見学者に、懇切丁寧な説明をしていたそうである。母もまた、戦時中の遺品の疎開や、記念館に収めるまでの大変な仕事をやり遂げて來た。母のそばで見聞きしていた私が、最後の整理を担当するようになつたのは、ごく自然な流れであつた。もつとも、兄（七代目）が大学教授の任務を終えたらバトンタッチする約束であつたから気楽に取り掛かつたのが、五年前、兄の急逝という事態とともに、私の肩にずつしりと重荷がのつたのである。

長崎空港から乗り継いだ飛行機の窓から、五島の島々がはつきりと見えた。こんな沢山の島の一つ一つに、測量隊の足跡が刻まれているのか、そして、あの坂部さんが眠つているのかと思うと胸が熱くなつた。

福江空港で伊能忠敬研究会会員の的野さんはじめ、資料館、観光会の方々のにこやかな笑顔のお出迎えを頂く。「坂部貞兵衛書簡十通 福江市への贈呈」を大変喜んで下さり、翌日の伊能ウオーカー福江大会で早速お披露目をしたいと準備をして待つていて下さつた。

案内していただいた福江島のそこここに、百七十八年前の測量隊の姿が目に浮かぶようであった。宗念寺の墓所は、想像以上に立派で、長い間坂部さんのお墓を守つてこられた皆さんの温かい心が感じられ、ただ感謝の気持ちで一杯になつた。そして、志半ばで倒れた貞兵衛の

悲しさ悔しさと、最も頼りにしていた人を失い、ここへ残して行かねばならなかつた忠敬の苦しみを、改めて思つた。

福江では、坂部貞兵衛は立派な主人公であり、そして、ここは彼の永住の地になつてゐる。やはり坂部さんの手紙を持つてきてよかつたと、安堵した。

貞兵衛の出身地ははつきりとは分からず、子孫の方のあてもない。佐原の記念館に置くのが自然だとも思えるが、佐原では、あくまでも忠敬の部下の一人である。私は、彼を主人公にしたかつたのである。

福江市の信頼できる方々の手にゆだねて、立派な五島観光歴史資料館に展示された貞兵衛の書簡を一人でも多くの人に見ていただき、彼が生きていたこと、立派な仕事をしたことの証しになつてほしいと願うのだ。

安藤さんと一緒に来られなかつたのが残念でならなかつた。坂部貞兵衛を、江戸東京博物館での「伊能忠敬展」の大会場で紹介できことを、涙が出るほど喜び、以前福江島を訪れたときのあれこれを話してくれた彼女が、出発四日前の交通事故のため、参加出来なかつたのである。

しかし、災い転じて福としよう。安藤さんと一緒に、再び坂部さんに逢いに行こう。高浜の海の色を、画家である夫にどうしても見せたい。ゆづくりと見て回りたい所が沢山残つてゐる。

福岡で初めてお目にかかる的野さんの風格あるお姿と故郷を思う熱氣溢れたお話しぶりが、私の「ひらめき」の発火点だったかもしれない。



福江島を訪れた会員一同(中央は的野圭志さん)

伊能古文書教室・佐原伊能家史料を読む

『佐原邑河岸一件』(二)

小島一仁

忠敬、油をしほられる

三郎右衛門と茂左衛門の両人を問屋として認めてほしいという願書を出したので、また奉行所から呼び出しがあり、願人の三郎右衛門と茂左衛門、名主惣代の次左衛門、組頭惣代の宗右衛門、船持百姓惣代の金蔵・利右衛門の六名が、二月三日に出頭した。この度の願書と、昨年中に出頭した者たちの口上書の控えについての吟味が行われた。

まず、吟味役の佐藤友五郎から、「佐原村は利根川とは十四、五町も離れていて、問屋も河岸場もない村だということだが——」という問い合わせがあった。これについて三郎右衛門(忠敬)が答えた。「佐原村は利根川から二、三町ほど離れていて、私ども兩人が昔から問屋をつとめてまいりましたが、川岸役(税)を納めるほどの場所でもないのでは、荷主たちが自分勝手に運送しておりました。しかし、今後は川岸役を差し上げますので、どうか、私ども兩人に限つて問屋を仰せつけ下さるようにお願い致します。」

ところが、吟味役の佐藤友五郎から

「昨年中、村役人惣代の者が申すには、佐原村は利根川を離れるごと十四、五町で利根川ぞいの村ではなく、川岸も問屋もないというのと、今後は近河岸の送状で通船するようにと申しつけたところ日延願をしたが、此の度のお前の申し口は、以前とはまるでちがうではない

か

と叱りつけられた。そこで、名主惣代の宗右衛門が申し上げた。

「昨年は心得違いをしてお答え申し上げましたが、帰村の後、小前どもを集めて取り調べましたところ、前々、問屋と申してきたものは、右の兩人ですが、川岸役を差し上げることもなく、商人たちが自分の送状で運送しておりましたので、問屋はないものと心得、不埒なことを申し上げました。この度の御吟味により、どうか兩人に問屋を仰せつけ下さい。」

しかし、吟味役から、またまた

「佐原村から利根川まで、去冬は十四、五町も離れていると申したのに、此の度は二、三町などはどういうわけか。」

と叱りつけられてしまった。

これについては宗右衛門も

「十四、五町というのは、佐原村の中に小川にかけた橋がありますが、そこまでおよそ十四、五町ありますので、そのように申し上げたのですが、居村の川岸の家からは二、三町はなれでおり、利根川にそそぐ小川の川口にも人家があります」

などと、しどろもどろの答えしかできず、ただ、佐原村は利根川ぞいの村であり、三郎右衛門と茂左衛門の二軒の家が、昔から問屋をつとめてきたことを認めてもらおうと、必死に弁明するだけであった。

その後、吟味役からは、近川岸までの距離、佐原川岸で扱う荷物数、積出しの口銭や倉敷(荷物の保管料)についての取調べがあつたが、最後に、「三郎右衛門、茂左衛門両家が川岸問屋運送の業を行つてきた証拠があるかどうか」という問い合わせがあった。

「証拠といつても、佐原村は家並の土地で何度も類焼したので、只

今では、享保前後の帳面よりほかにあるまいと存じます」

「帳面は自分で書くものであるから証拠にはならぬ。証拠がなければ、近川岸の送状で運送するように」

乍恐以書附奉願上俟

下總国香取郡佐原村願人左之通者共奉申上候、
私共願之儀、三郎右衛門茂左衛門兩人先規問屋と
申上候儀、証拠書物等二ても有之哉、申口のみ
にては御取用難被遊段被仰聞候、御尤三奉
畏候、尤三郎右衛門茂左衛門義は往古祖父代以前

よりも運送引請候ニ付、縦近年荷主とも
自分送状にて運送仕候もの有之候とも

古き帳面書物等在所ニ所持仕候間、何幸

奉差上度奉存候間、來ル十五日迄御吟味御
見渡被成下、其後ニヒニ御恩旨、委頃ニ矣

以上

明和九年二月

願人 三郎右衛門

御奉行所様

この願書を差し出して、帰村を申しつけられたとき、吟味役は、「帳面でも何でも、証拠になりそうな書付を持参するように」と言つた。以前には、「帳面は証拠にはならぬ」と言つたのに、今度はそれとはちがう言い方なので、三郎右衛門は、少し氣をとり直した。

川岸役永壹貫五百文

吟味の翌日、二月四日から連日大雪が降りつづいた。しかし、忠敬は、降雪をものともせずに四日午後に江戸を出立。行徳（ぎょうとく、市川市）、木下（きおろし、印西市）を経て、六日の夕刻に佐原に帰着し

御奉行司

卷之三

名忠書附錄卷之二

た。そして、すぐに、その夜と翌七日に証拠の書物をさがしたところ、昔からの運送請取書付がたくさんあるのが見つかった。その中から年代的に証拠になりそうな分を取り揃え、ほかに元文・延享の帳面を持参してまた江戸にもどった。江戸では万全の準備をととのえた後、十三日夕刻、奉行所に差届けをし、同時に、願書に証拠書類をそえて提出した。

名媛詩歸卷之二

常熟固當浮鄧作原村之名。前後三十一年
初在村旁運土築堤。有時水急。不能載
高。人船之多。輒傾。因船而下。以至送活。
特往候視。每上一沙處。被擋。之謂。惟面書。物
者。水多。則。長。少。則。短。方。近。則。近。
重。則。輕。別。而。移。之。惟。面。書。物。重。則。輕。之。如。移。資。
以。水。之。多。之。往。而。部。之。而。無。布。之。不。利。積。
多。之。而。古。恰。為。器。之。破。恰。紅。布。裏。足。一。少。相。
用。生。事。反。互。換。之。未。即。當時。移。用。以。恰。面。布。差。
去。去。而。為。物。宜。送。往。該。活。書。之。之。修。
是。亦。常。常。上。以。妙。辦。也。之。亦。休。事。也。
終。終。也。出。於。始。有。考。以。書。物。事。若。去。

何より此節を重ねて且松村方を去り月
立度に市場より酒の販近多賣實人入酒諸
處處に旅館にて酒造業者三七人立
て居る。是れが為めに實加令之酒士而此處去如レ
一月奉上酒往在内諸に貯蔵せん。而後も江戸
ガ一遷道新大引旅館にて酒の貯蔵在石御前
市と百一外河原ホニ支船モ古御殿松竹城
中川町を移す。市場前自御ト裏御事
物事務所文平別余の小弟。之者玄翁號也
之と酒造業者内宣工の他も皆文平之補
助也。八瀬ノ上酒和事も難事御成御成
物也。其文政御年少則松方商人進毛酒造
業者御宣加令上酒仕合の事。御令物。御
屋松方商人方と之はれ。而後御殿草創也
御酒屋工の酒業御令御業。之と出張、之江戸
松方と之はれ。其御業御業御業。

中行固嘉最敬作昌

西和九年二月

御幸行詞稿

東坡先生集卷之三

卷之三

卷之三

乍恐以書附奉申上候

下總國香取郡佐原村三郎右衛門茂左衛門申上候
私共村方運送之儀ニ付御尋御座候所、私共

兩人之儀は先規より問屋と申伝運送讀

拂仕候段奉申上候處、証拏二可相成帳面書物、
にても有之哉之旨被仰聞候ニ付、当十五日迄

船問屋荷物請帳は數年来の義に御座候

得とも其年ニ仕切勘定相済外ニ可用帳面无之故古帳面等は破帳仕、尤裏返し候而相用候事故又故ニ相成、當時相用候帳面奉事

上候、尤荷物運送仕候請取書有之候間
是亦奉差上候、此儀も年々相済候事故

何分御勘弁奉願上候、且私共村方は壹ヶ月二

六度之市場ニ御座候ニ付、近在より売買人入込諸
色共に請拂仕、其上酒造醤油共二三拾七人有

之、右のもの共冥加ニ金三拾七両弐歩去卯ノ

十二月より上納仕候御請二御座候、是等之儀も江戸
出し運送私共引請仕候義ニ御座候、右駄三付

此上万—外河岸等之支配二も相成候様行成申候而は佐原村市場も自然と衰微二相成

物事差支千軒余之小前之者甚難義仕候

其上酒造醤油御運上之儀も差支手遠ニ相成候得、後々土納物等も難相成林二行成

候而ハ是又及難義候、則私共兩人逆も酒造

醤油冥加金上納仕候もの共ニ御座候間、何分舟問
屋ム共河ハテ工技仰付坡下置候様ニ奉願上矣

尤御運上之儀は御吟味之上御請可仕候間

此上之御慈悲奉願上候、以上

近藤身石御門御用印所

明和九年辰二月
願人三郎右衛門

御奉行所様

卷之三

本文三郎右衛門茂左衛門奉申上候通相違無御座候
何分舟問屋之儀は右兩人之者江被仰付被下
置候様、私共一同奥書を以奉願上候、以上

名主懇代

次右衛門

宗右衛門

百姓代
金蔵

川岸問屋とは直接関係のないことではあるが、右の願書を見ると當時、佐原村には、酒、醤油の醸造人が三七人もいたと記されている。伊能家の『家牒』によると、佐原村での酒造は、寛文年間に、五代目景知によってはじめられたようであるが、それから約一〇〇年後の明和・安永の頃が、佐原の醸造業の最盛期に当たっていたのではないかと思われる。

さて、それはともかく、右の願書と証拠書類の提出によって、三郎右衛門と茂左衛門の二人は、佐原村の川岸問屋として公式に認められることになった。そこで、次の問題は、川岸役をどれだけ上納すべきかということであった。

最初、「兩人で永二五〇文差し上げます」と願つたところ、吟味役から「そんなことでは相済まぬぞ、もともとお前たちの方から願い出たことなのだから、そのくらいなら願いをやめたらよかろう」と叱られ段々額がつり上げられて、結局、二人で永壹貫五百文上納することにきつた。「永」とは「永楽通宝」の略で、「永壹貫文」といえば、金壹両に當る。従つて、金に換算すれば、三郎右衛門と茂左衛門の二人で、一年に、金壹両式分を上納することにきつたのである。

林鶴一（一八七三—一九三五）

数学者。徳島市の人。東北大教授。「東北数学雑誌」を創刊して日本数学界に新研究の機運を作つた。（広辞苑）

芳名録より — 佐原伊能家を訪れた人々 —

大正二年
仙台林鶴一

伊能忠敬宛江川英毅書状と伊豆測量（三）

小森正和家文書について

仲田正之

亥四月

前回紹介した（8）の報告状と対比できる資料が、小森正和家文書（天城湯ヶ島町門野原）中にある。一連の測量関係文書からつぎの三点を選んで、行程などについて説明しておこう。

ここにあげないものには、人馬調達・宿泊賄入用などの書上がある。

（九）測量に関する触書（文化十二年）小森正和家文書

申渡書

天文方

高橋作左衛門手附

下役三人

伊能勘解由

弟子式人

棹取中間

式人

右者此度為測量御用當月廿七日江戸出立、別紙道順之通り、国々相廻り測量可致候間、其段可相心得候

一右二付他領ならびニ嶋々江渡海之節者船ヲ出し差支無之様可致候、尤測量道具為手入止宿いたし候儀も可有之候間、是又差支無之様可取計候

一廻國先ヨリ江戸領所江御用状差出候儀も有之候ハ御用便ヲ以可相

届、江戸表ヨリ廻國先江御用状差出候節心當之場所可相達候間、其所江到着以前候ハバ着之上相届、出立後三候ハバ先々相届候様可致、右之趣士大炊頭殿・青下野守殿被仰渡候間申達候

但本文之趣万石以下最寄知行所之分江も先々江申繼、差支無之様可取計旨可相達候

右道順書之通、国々相廻り、尤其所之様子ニ而最寄山々城下街道等も相測候間少々宛前後も可相成事

一字大和田ヨリ無測量ニ而鶴間江立帰り、同所ヨリ測量相始、座間通り武州八王子ヨリ日光街道通り中山道熊谷迄測量、右街道筋最寄之場所ヨリ川越まで測量いたし候、

一熊谷ヨリ鴻巣夫ヨリ荒川ニ隨ひ、堤通千住夫ヨリ小塙原町迄測量いたし候積

別紙之通御書付を以被 仰渡候間、得其意、諸事差支無之様可取計候、且万石以下最寄知行所之分江ハ先々申繼、是又差支無之様可取計候、此廻状村名下江名主令請印早々順達從留村可相返候、以上

亥四月晦日

葦山御役所

別紙之通御書相廻り候間、右最寄知行所村々江申達候處被仰付候間、諸事差支無之様御取計可被下候、以上

亥市四月晦日

瓜生野村

名主 武右衛門 印

下修善寺村

印 印

小立野村

印 御用二付組頭代印

本立野村

印 御用中代印

太平村

印 印

松ヶ瀬村

印 印

下柿木村

印 印

門之原村

印 印

右村々

御名主・組頭 中

これは、渡海・止宿等通行の便宜・江戸歴所と出張先との御用状取計らいにつき、老中土井大炊頭（利和）・青山下野守（忠裕）達旨の「申渡書」（亥四月）と、「別紙道順書」からなる。これは御領、私領くまなく達されるもので、その意をうけた葦山役所より四月晦日付をもつて、測量関係方面村全域に指示された。それをうけた廻狀元村の瓜生

野村（修善寺町）名主武右衛門から、同じく四月晦日付をもつて、下修善寺村—小立野村—本立野村—太平村—松ヶ瀬村—下柿木村—門之原村へ伝達された、この「名主請印状」が末尾に綴じこまれている。

別紙道順書によれば、第一段階は四月二十七日江戸出立、三島まで無測量（三島より開始して下田まで測量、渡海して伊豆諸島全島測量、下田帰帆、同所から小田原まで海辺測量、の予程である。しかし、（8）の報告状にみられるように、下田で日和待の間も連日測量が実施されている。平成六年三月二十一日の「伊豆日日新聞」に鈴木茂氏の「米屋文書」（伊東市川奈、前島家）より、伊豆測量関連文書の紹介が掲載された。掲載された写真より見ると御用留横帳の部分であるが、出典

名の記載はない。

一文化十二亥年五月、公儀天文方国々島々測量、高橋作左衛門殿下役永井甚左衛門殿坂部八百次殿門谷清次郎殿伊能勘解由弟子式人、五人富戸より川奈海岸通新井堺かんら迄案内いたし候

これでみる限り、五月中に下田より川奈・新井の境界「かんら」（神浦）までの測量は終つたようである。下田出港が五月十八日であるので、（8）の報告状の五月十一日からの間に実施されたものと考えられる。伊豆諸島の測量は同年十一月八日まで及んだ。目にする機会の多い八丈島の図はこの時の測量によるものである。

第二段階は、海岸測量終了後根府川通熱海から三島まで、三島・佐野通から箱根湖水を測量。それより駿州大宮街道通りに移り、富士浅間・富士三ヶ寺ならびに内房村網橋まで測量、それより平塚まで移動して測量再開、厚木通りを荻野山中まで、それより橋本から鶴間通りを武州中渋谷村字大和田まで鶴間より藤沢宿まで測量。

大和田から鶴間にもどつて測量再開、座間通り八王子より日光街道通り中山道熊谷まで、この街道筋最寄から川越まで測量。熊谷より鴻

巣、それより荒川に隨い堤通千住、それより小塚原まで測量。

下田の日和待で日程が狂つたように、すべてこのとおりであつたとは思われない。しかし、陸上においては大きな狂いはないはずで、下田帰港後発せられた行程表が発見されれば明らかになることである。

一買上帳

壱冊

一御送紙

壱状

一御用泊觸

三本御入

測量方

(一〇) 測量御用御觸書 小森正和家文書

文化十二年

門野原村

御用御觸書扣帳

名主 善右衛門

亥五月三日夜五ツ時

(堅帳)

明四日本立野村出立泊所繰替、左ノ泊リ順ニ相越候条得其意、宿用意可有之候、且先達而相觸候通リ村々書付相認メ、前之泊リ江持參可有之候、以上

亥五月三日

測量方 御印

四日泊門の原、五日泊 萱野新田

六日泊リ梨本、七日泊 蓮臺寺

八日泊下田町 右村々役人中

五月三日 夜五ツ半時

本立野村ヨリ受取申候

品川 覚

一御請印帳よ二 壱冊

一御證文写 三通

一添觸 四通

一御用先觸 五通

測量方 六通

一添觸 七通

一休泊付 八通

一御本紙 九通

一七品御箱入

一御勘定御奉行様御連印御證文 壱通
右者此度測量為御用御役人中ならびニ御荷物御差立ニ付被成御渡候間則差越申候、尤御證文之内よ古れ三ヶ所有之、其外墨付よこれ等無之候間、大切ニ致拝見早々繼送可被申候、以上

亥四月二十六日

御伝馬役

高野新右衛門

印

從品川宿御用先迄

右宿村問屋名主中

覚

御證文

一人足七人

馬三四足

長持壱棹持人足

賃馬壱足

門谷清次郎 印

坂部八百次 印

永井甚左衛門印

右之通御觸

江戸傳馬町

東海道三嶋宿

天城通り下田迄

問屋名主組頭中

覺

御證文写

御先觸

御休泊附

箱入

三通壱通

壱通

壱通

御伝馬役

高野新左衛門

印

覚

御用先キ 所々問屋名主組頭

一人足七人

一馬壱足

一長持壱棹

永井甚左衛門

坂部八百次

門谷清次郎

亥四月 備前印

御上下拾壱人様也

馬三四 天文方高橋作左衛門手附下役永井甚左衛門 坂部八百次 門

谷清次郎

亥四月 備前印

外御證文御觸なかし壱通

△三通なり

亥四月 備前印

一品川問屋御請印横帳 壱冊

一御泊付 壱通

一御先觸 壱通

一御案組帳(カ) 壱通 箱入

右藤沢宿ヨリ添書なり

四月二十八日

藤沢町

杉山弥兵衛

従平塚三嶋北条下田まで

御用先キ

所々問屋名主組頭

一人足七人

一馬壱足

一長持壱棹

永井甚左衛門

坂部八百次

門谷清次郎

代四百廿弐文

一白米五升五合

御上下拾壱人様

錢六貫九百文(カ)り米壱升代七拾四文也

一本錢百七拾九文

一同百六文

御下六人様

メ七百拾壹文

右同文言

亥五月四日

門野原村

名主 善右衛門 印
組頭 儀右衛門 印

文化十二年五月三日夜五ツ時（午後八時半）、門野原村名主・善右衛門（小森氏）の作成になる。測量方の発した御用書類一覧、休泊順、人馬触、休泊経費書上などである。最後の測量らしく幕府事業として権威が附与されたことがわかる。

休泊については、五月四日門野原泊、五日萱野新田泊、六日梨本泊、七日蓮台寺泊、八日下田泊、となつていて。（8）の報告状では、二日が北条泊、三日が立野泊（修善寺）であり、四日が門野原、十日前に下田に到着しているから予定どおりである。人馬は人足七人・馬四疋である。

(一一) 測量御用方々名前書 (省略)

まとめにかえて

江川英毅の学術交友は、太郎左衛門が襲名であったことから、交友先の研究者に英龍と誤認された例が多い。英毅のすぐれた学術とその交友背景が英龍を育成したのであるから、英毅の交友を実証していくことは英龍認識を深めていくことになる。

最初に述べたように、伊能忠敬と交友のあつた江川太郎左衛門（江

(あとがき) 世田谷伊能家保管史料のうち、重要なものとして江川英毅の書簡がある。これらを紹介して下さる適任者は仲田正之江川文庫長しかいらっしゃらないので、許可をいただいた上、平成七年葦山町発行の『葦山町史の栄』第一九号から抜粋、三回にわたって連載させていただいた。(安藤)

作品紹介 「蝦夷地測量図」

浅井 京子



(絵本着色 縦 114.1cm × 横 41.9cm)

加藤 全彦 氏蔵

本図は明治二十年代、石井重賢（号・鼎湖 一八四八～九七）によつて描かれた測量図で、伊能忠敬の蝦夷地南岸測量を描いたものと推察される。忠敬はこの最初の測量の際には、まだ鉄鎖を使用していないので、本図の主人公は忠敬の後に蝦夷地測量を完成させた間宮林蔵ではないかとする説もある。しかし、忠敬の蝦夷地測量を画題として一幅の絵を構想するにあたつて、鼎湖は山を背にした村落を遠望する海岸で地図を作成する主人公を描く事とした。そして画題の意図をより明瞭に伝えるため、老若のアイヌの人、鉄鎖・杖先羅針などの測量器具を配したと考えられる。鉄鎖は伊能忠敬の測量を象徴する器具として、実物に忠実に描かれた杖先羅針と共に選ばれたのである。さらにもうならば、実際の地図制作では本図の机の上で描かれるような作図は野外測量の数値をもとに室内でおこなわれるものであった。

鼎湖は幼いときより日本画を父鈴木鶯湖（文晁を師とする）に学んだ。安政六年（一八五九）、六世乾山を名のつた陶工・三浦乾也の養子となり、のち石井家を継いだ。明治三年（一八七〇）大蔵省に出仕、のち印刷局に転じて同二八年まで官吏生活を続けた。この間、絵画に関する興味は同僚に川村清雄がいたことなどから洋風画に傾いていたが、明治二十年、龍池会（日本美術協会の前身）に入り日本画家としての活動を本格化した。また二一年には、九鬼隆一を長とする全国宝物取調委員の一一行に随行して、近畿地方の社寺に残された宝物の写生にあたつている。こうしたことから次第に歴史画の制作が多くなり、明治二三年の第三回内国勧業博覧会には『豊公醍醐花見の図』を出品し、褒賞を得ている。なお、石井柏亭・鶴三はその子息である。

ところで明治二二年には、東京芝公園丸山古墳上に「贈正四位伊能忠敬先生測量遺功表」が東京地学協会によつて建てられ、同二四年、少年を対象にした初めての忠敬伝『伊能忠敬翁』（幸田露伴）が刊行される。こうした明治二十年代に入つての、忠敬顕彰の高まりのなかでこの作品も制作されたのではないだろうか。

なお、明治二六年、鼎湖も所属していた明治美術会の月次会が地学協会で行われることを記す『鼎湖絵日記』の記事は、本作品の成立と直接関係があるとの確証もないのだが、この時期の忠敬顕彰に果たした地学協会の役割を考えると、鼎湖が伊能忠敬へ関心を寄せるきっかけの一つになつたかと想像したくなる。また、この作品の旧蔵者であつた加藤久太郎（本図の依頼者かもしれない）は万延元年、市原郡八幡町に生まれ、江湖新聞社・民権新聞社・東海新聞社の経営に関わる。明治三九年には千葉町長となり多くの功績を残した。佐倉宗吾に私淑し、詩歌俳句を趣味とし、書画を愛好した人物である。

「門外不出」含む70品

「伊能忠敬と九州展」来月開催

西日本をかたる新規
は「伊藤洋行」、式作
には「日本船頭會社」、中
國の「十四銀行」、中
國、日本、英國、米國、
西洋、小山、佐倉、森田の
れで、これが明治政府の
財政的基盤となつてゐ
る。これが本邦の明治
開拓がれたが、本邦は明
治の初めから、外國の開
拓が進んでいたのである。
この開拓化した外國の開
拓は、本邦の開拓に影響
したのである。

伊能忠敬研究会代表理事 渡辺一郎

伊能忠敬研究会代表理事 渡辺一



而論者固亦有之。回

至高處為之預
測量在試驗基礎上
在設計上起着相
互作用的關係
一日張七東方先生

開催案内

◆10月6日(金)～11月5日(日)、北九州小倉北区歴史博物館
市立歴史博物館(093-571-1490)。月曜日休館。ただし9月30日
◆一般会員100円(20人以上の団体料金)、高大生300円(同上)
、小中学生100円(同上)60円
主催 田原敬思研究会、北九州市教育委員会、朝日新聞社
後援 那珂市立图书馆、福岡市立图书馆、同窓会委員会、北九州市
民、NHK北九州放送局、九洲明日报道
特別協賛 株式会社ゼンリン

卷之三

「伊能忠敬と九州展」報告 北九州歴史博物館、朝日新聞西部本社と伊能忠敬研究会で実行委員会をつくり、北九州市で開催した「伊能忠敬と九州展」(10月6日—11月5日)が終わりました。担当幹事の古賀方子さんには大変お世話になり有難うございました。展示内容はとても良かったと思いますし、朝日新聞西部本社では、このような特集を組み、会期中の展示品案内を五回もやつていただきましたが、入場者数は31日間で5064名といまいちでした。11月1日の「そのとき歴史が動いた」の影響は大でした。

伊能忠敬の江戸日記 四

佐久間 達夫

一、第五次測量江戸帰着の日から第六次

測量出立の日までの記 続き

原本 忠敬先生日記 十九

四月十日

朝より天気に成る。午後より白曇。

四月十一日

朝より曇。五ツ後より段々雨、終日降る。

四月十二日

朝より晴天。坂部貞兵衛金四十一両持參下さる。浅草より差下墨十丁御使に遣す。昼後より曇る。

四月十三日

晴、又曇る。

四月十四日

午前晴、午中晴る。午後より曇る。此夜八ツ後月食あり。

四月十五日

宵より朝雨、午後迄降る。

注釈

・会田算左衛門（一七四七～一八二七）

会田安明は、通称を算左衛門といい、号を自在といった。算学者として著名。関流に対

抗して最上流を称えた。天文学者ではないが、「天文簡要論」「地周直径里數術」などの著述がある。伊能忠敬の内弟子として全国測量に従事し、「伊能東河先生測量地伝寫録」を編述した渡辺慎（尾形敬助・顕次郎ともいう）は、会田安明の実子だといわれている。

・高橋善助（一七八七～一八五六）

高橋善助は、高橋至時の二男で、天明七年に大阪に生まれた。伊能忠敬に従事して第五次測量に参加し、文化五年八月に天文方渋川富五郎正陽の養子になり、翌年家督を継ぎ天文方となる。通称を助左衛門、字を子申、号を滄洲、三角堂といつた。天保七年に父至時の遺業である「ラランデ暦書」の訳解を完成させ、「新功曆書」四〇冊、「新修五星法」一〇冊を幕府に上呈した。又弘化元年には、「寛政曆書」三五冊、同続錄五冊も完成させている。

・松野茂右衛門 山鹿八郎右衛門
津輕藩士。忠敬の江戸宅に屢々訪れる。

・大野弥三郎規行

江戸神田松枝町の時計師で父の弥五郎規貞とともに伊能忠敬が全国測量に携帯した象限儀や折衷尺などの測量機器の製作にあたった。

・伊能七左衛門

伊能三郎右衛門家初代景久の一男七郎右衛門の二男七郎左衛門が佐原村横川岸（現宝珠島前の一角）に分家したのが七左衛門の祖である（伊能家譜・伊能景敬萬控記）。

三代清茂の妻リヨは、伊能三郎右衛門家六代景利の娘であり、五代景茂の一男清茂は伊能家九代長由の娘ミチ（忠敬の本妻）の先夫である。また伊能家十四代景徳（端美）は、七左衛門成徳の二男である。伊能三郎右衛門家十六代敬氏の弟洋氏が七左衛門家の墓地の管理をしている。

・松田 琴

松田琴は忠敬の三女で、常陸国竜ヶ崎村（現茨城県竜ヶ崎市）で代々庄屋を勤めた松田文右衛門家に嫁いだ。夫は光遠といい、二人の間に一子文一郎がいた。

菩提寺は、竜ヶ崎市の大統寺であつたが、後に東京都江東区三好町の淨土宗攝心院に移された。法名は「般山智舟大師」という。

- ・永沢吉郎兵衛俊安 祖父は伊能七左衛門の二男で、義父は永沢忠右衛門尚俊。妻は永沢仁兵衛軌景の養女ソノである。
- 俊安の妹セヤは、常陸国潮来村（現潮来町）の窪谷庄兵衛維則に嫁いだが、夫に早死され妙真と名のり、生涯和歌や書道をたしなんだ。
- 文化四年（一八〇七）四月十六日、此日曇る。
- 四月十七日 記入なし。
- 四月十八日 此日雨。
- 四月十九日 浅草へ行く。それより長者町高橋三平殿へ高橋君同伴にて行く。夜雷雨。
- 四月二十日 晴天。
- 四月二十一日 朝より晴天。
- 四月二十二日 同断。四月二十三日 同断。
- 四月二十四日 曇天。此日旅扶持方返納。
- 四月二十五日 朝より雨。終日降る。
- 四月二十六日 朝より晴天。此夜晴。遠鏡十字切れ不測量。
- 四月二十七日 晴天。午前中前後晴。
- 四月二十八日 曇天。同じ。
- 四月二十九日 曇天。同じ。夜雨。高橋富右衛門来る。
- 五月朔日 朝より小雨。四ツ頃止む。曇天。大家来る。
- 五月一日 微雨、午後より止て曇天。
- 五月三日 曇、又小雨。
- 五月四日 朝曇、又微雨、此夜雨。
- 五月五日 朝より大雨、午後より小雨。
- 五月六日 曇天。
- 五月七日 午前曇る。午後晴る。
- 五月八日 朝より晴天。
- 五月九日 朝より小雨、終日小降り。
- 五月十日 朝白雲多し。午後より白雲。
- 五月十一日 晴る。白雲多し。午後より白雲。
- 五月十二日 朝より曇。終日白雲、微雨もあり。
- 五月十三日 朝より晴る。午中曇、午後小雨。
- 五月十四日 曇天、微雨。浅草へ午後にいく。
- 五月十五日 晴天。五月十六日 晴天。
- 五月十七日 晴天。
- 五月十八日 晴天、白雲あり。
- 五月十九日 晴天、雲多し。夜晴天に成測量。
- 五月二十日 朝曇、昼も晴雲。
- 五月二十二日 朝より曇、微雨。東風、伊能三郎右衛門来る。
- 五月二十三日 曇天、微雨。東風。
- 五月二十四日 曇、微雨。午後より晴曇。夜は曇天雨あり。
- 五月二十五日 曙天、朝雨、時々雨。東風。伊能三郎右衛門箱崎町迄行き明日帰國する積り。
- 五月二十六日 曙天、朝雨、時々雨。東風。伊能三郎右衛門来る。小雨あり。夜晴る。
- 五月二十七日 晴曇。朝は曇、午前より晴る。
- 五月二十八日 曙天。時々雨。板鼻良助来る。
- 五月二十九日 朝より曇天、微雨あり。ハツ頃高橋才兵衛来る。測器を渡す。
- 五月三十日 朝より小雨、又止て曇天。富田子来る。此夜大雨降る。
- 六月一日 朝より大雨、七ツ後に至る。七ツ後より、小雨。
- 六月三日 朝より大雨、午後に至る。ハツ後より小雨、七ツ前より止む。
- 六月四日 朝曇、昼も晴雲。此夜晴高橋測量。
- 六月五日 終日曇天小雨。
- 六月六日 曙、午後に微雨あり。
- 六月七日 朝より雨、終日小雨。今井友治来る。
- 六月八日 朝より雨、午後微雨。
- 六月九日 朝より曇天、微雨あり。
- 六月十日 朝より晴る。稻葉丹後守用人坂口李之允、間氏添状持参來り暫時。
- 六月十一日 朝より白雲。
- 六月十二日 朝より曇、ハツ半後に微雨あり。
- 六月十三日 曙天、小雨。
- 六月十四日 晴曇。午後より浅草へ行く。それより近藤重蔵へ行く。六分図一枚。
- 六月十五日 朝曇天、微雨あり。午後より天氣に成る。

六月十六日 朝曇 午前微雨、午後曇。午後桑原へ寒熱升口、羅鍼持參。餞別金武百疋持參。

六月十七日 朝曇 午前微雨、午中より晴、暮より夜に入り大雨。

六月十八日 朝曇 午前より晴天。午後より堀田攝津守殿へ松前御用の恐悦、並びに暑中見舞申上げ候。それより猿楽町佐藤修理駿河台鈴木町渋江新之助暑中見舞致し、サヤキ町津田侯へ土用見舞申上げ候所御見通し仰付七ツ前に帰宅。

六月十九日 朝曇。終日曇る。七ツ前小雨。

六月二十日 朝曇。四ツ半頃より晴天。

六月二十一日 朝晴曇 午中前後曇る。八ツ前より大雨、七ツ頃止む。それより曇天。

六月二十二日 朝曇る、午前より晴る。三州和泉都築弥四郎來向。富田幸助来る。午後秋山松之丞殿へ暑中見舞。それより浅草へ行く。

六月二十四日 朝より曇る。四ツ頃より晴る。朝より晴。暮に曇。夜晴て測る。

六月二十五日 終日曇る。

六月二十六日 朝曇。五ツ半頃晴る。

六月二十七日 朝曇。五ツ半頃晴る。

六月二十八日 朝曇。五ツ半過より晴る。

六月二十九日 晴天。青木勝次郎来る。

七月朔日 晴天。門谷清治帰る。

七月十五日 朝より晴天。夜曇る。

七月十六日 曇天。浅草へ行く。

七月十七日 朝より午前曇 午中より晴又曇。小雨あり。

七月十八日 朝より晴天。

七月十九日 朝より晴天。夜高橋測る。青木回る。

七月二十日 朝より晴天。夜下河辺測る。沿海三分の図□□。

以廻状申達候。然者、屋舗相對替願之通

去月二七日被仰付候に付、下店御成造拌領屋敷へ今一八日引移し候。此段之達、以廻状無滞早々順達留より御返可有之候。以上。

六月二八日 渋江新之助

六月二九日 晴天。南風。

七月一日 曇又晴。

七月二日 晴天、午中前後曇る。八ツ半後より大曇。

七月三日 晴天、午中前後曇る。八ツ半後より大曇。

七月四日 晴天、下河辺に對數表を渡す。

七月五日 曇天、八ツ半後微雨、雷。

七月六日 朝曇、五ツ後より雨、雨止て曇天。

七月七日 晴、又曇る。

七月八日 朝より晴天。

七月九日 晴曇、午中曇る。浅草へ行く。

七月十日 同断。

七月十一日 曇天、小雨、宵晴、深更雨。

七月十二日 朝より曇天。

七月十三日 晴曇。

七月十四日 朝五ツ半迄曇る。朝より暮迄晴天。夜曇る。

七月十五日 朝より晴天。

八月一日 曇天。浅草へ行く。

八月二日 朝より曇天。久保木地図初め。

八月三日 高橋氏来る。夜に入て帰る。

八月四日 曇、晴。夜は曇る。

八月五日 宮川硯石を取寄る。

八月六日 曇。

八月七日 曇。

八月八日 曇。午後浅草へ行く。

八月九日 晴天。

八月十日 曇る。暮方微雨。午後桑原へ行く。

八月十一日 朝曇、四ツ後より雨。

八月十二日 大曇天。八月十三日 大曇天。

八月十四日 大曇天、七ツ後より小雨。佐原主人、三治郎来る。

八月十五日 晴天。風。八幡參社十九日に成る。

八月十六日 朝より晴天。

八月十七日 曇天。微雨。

七月二二日 朝より曇天。此朝青木来る。

七月二三日 同断。雷雨。朝後大雨。

七月二四日 同断。雷雨。午後より大雨。

七月二五日 白曇。久保木氏(12)出府着。

七月二六日 晴天。

七月二七日 白曇。青木回る。

七月二八日 晴天。

七月二九日 晴天。南風。

八月朔日 晴天、夜晴て風あり。此日七ツ前成る。風もなぎる。夜は曇る。

八月三日 朝より曇天。久保木地図初め。

八月四日 曇、晴。夜は曇る。

八月五日 宵より風大曇。四ツ後より天気に成る。風もなぎる。夜は曇る。

八月六日 朝より曇天。浅草へ画盤一面遣す。

八月七日 曇。

八月八日 曇。

八月九日 晴天。

八月十日 曇る。暮方微雨。午後桑原へ行く。

八月十一日 朝曇、四ツ後より雨。

八月十二日 大曇天。八月十三日 大曇天。

八月十四日 大曇天、七ツ後より小雨。佐原主人、三治郎来る。

八月十五日 晴天。風。八幡參社十九日に成る。

八月十八日 曇天。微雨。
 八月十九日 晴天。朝五ツ後、間五郎兵衛来る。四ツ前会田算左衛門来る。九ツ前高橋作左衛門、並びに坂部貞兵衛親子来る。間、会田は五ツ後に白木屋蔵店棧敷へ遣す。青木、下河辺、門倉なども同伴。九ツ頃より高橋氏、我等、同棧敷へ罷越、一番練ものより七番迄一覽。八ツ半頃に一同帰る。此午前往來過分に付、永代橋崩れて大勢のも横倒しに及べり。

八月二十日 曇天。微雨。七ツ頃大野弥三郎半円方位盤と羅鍼持參。

八月二十一日 小雨。

八月二十二日 白曇。時々晴。

八月二十三日 小雨。桑原氏へ行く。三治郎同道。

八月二十四日 同断。佐藤喜右衛門来る。十九日にも来る。

八月二十五日 曇天。小雨。

八月二十六日 曇天。三郎右衛門、三治郎を連れ津田御屋敷へ行く。

八月二十七日 晴天。三治郎を連れ、浅草暦局へ行く。

八月二十八日 曇晴。午中見る。夜晴曇。

八月二十九日 曙天。三治郎帰国。

九月朔日 朝より雨。九月一日 曙天。

九月三日 晴天。尾形退去。

九月四日 晴天。門倉他行。此夜坂部、青木止宿。彗星を測る。

九月五日 朝より晴天。門倉他行。

九月六日 曙天。暮に雨。

九月七日 曙天。午前より雨。午後より門倉他行止宿。

九月八日 曙天。小雨。八ツ頃より天氣。夜測る。門倉氏夜帰る。

九月九日 曙天。残らず休み。暮より雨。

九月十日 曙天。残らず休み。暮より雨。

以廻状申達候。然者、佐藤修理殿義、今七日甲府勤旨支配被仰付候に付き、明き組の内月番支配衆牧野若狭守殿引請に相成候。

一、諸届の儀、何事不寄、明き組の内も例の通届書式通共自宅へ可被差出候。尤、諸届け速不申様可被致候。且亦、修理殿跡御役定与道々可被仰付義者存候間、御自分方明細書、屋敷書付早々認置候様可被致候。

廻状無違滞早々順達留りより可被相返候。以上。九月七日 渋江新之助

(十九人名前)

猶々来る十四日逢対自宅へ例の通御越可有之候。以上。

深川南松代町代地家主多右衛門店本間半石衛門より来る。黛謙治郎方へ遣す。速刻付旨翌朝遣す。麻生永松町家主市左衛門店門倉と伊兵衛朝より出る。

九月十日 曙天。未明麻生迄廻状遣す。此日より柴山伝左衛門出る。

九月十一日 曙天。門倉、八ツ後に帰る。

九月十三日 朝曇晴、坂部参らず。門倉外出。

九月十四日 曙天。門倉昼後より出る。

九月十五日 朝小晴、昼後より曇る。門倉病氣。八ツ後お琴着。

九月十六日 朝曇、夜前より雨、八ツ後止む。門倉他行。

九月十七日 朝曇。お琴、龜嶋へ行く。四ツ頃より雨風。門倉帰らず。

九月十八日 朝より晴天。内弟子御手当金浅草迄下る。門倉帰らず。

九月十九日 同じ。九月二十日 同じ。

九月二十一日 晴天。

九月二十二日 晴天。竜ヶ崎松田丈右衛門来る。四ツ後廻状来る。

以廻状申達候。然者、今二十日佐藤修理殿跡御役根来喜内殿被仰付候間、御自分方為御願明細書、屋敷書付、根来喜内殿宅へ早々持參可被致候。尤、服紗小袖麻上下着用にて可被相越候。病氣美矢昌等に候ばば御名代來二四日迄に明細書、屋敷書付可差出候。

一、御自分方諸書物、修理殿へ被差出候。振合の通認、来月六日迄に可被差出候。右廻状御刻付早々順達留りより可被相返候。以上。八月二〇日 渋江新之助

根来喜内殿宿處、本所石原。九月二三日未明、浅草新旅籠町家主藤七店高橋政蔵へ届く。

緊急速報

十一月一日に放映されたNHK総合テレビの「その時歴史が動いた—伊能忠敬」のリポートを大阪放送局のデレクタからいただけきましたので御紹介します。視聴率一一、四%でいい成績でした。

放送を見て寄せられたメッセージは八〇通程度でしたが、意外なことに三〇通が男性で、五〇通が女性でした。女性は三十代、四十代の方が目立ち、男性は六十代、以上の方が多い様です。頑張れ、男性諸君、伊能忠敬は男性の世界の人物ですぞ。

主な反響はつぎのようなものでした。◎は多かつたものです。

- ◎ 地球の大きさを測るためにものであつたことは知らなかつた。
- ◎ 小さい頃からの星の興味を生かした事に感激した。
- ◎ ゲストの「造酒業を過不足なくこなした事がその後の人生に生きた」という話に納得。
- ◎ 二つの墓に伊能の人柄がしのばれた。師匠とともに眠る墓。人としてすばらしい。訪問したい。
- ◎ この偉業を五六歳から始めたとは! もつと知識が有つたのかと思つていたので驚いた。
- ◎ 奥さんはどうだったか知りたかった。
- ◎ 海岸沿いの測量の様子から200年前の作業風景が想像できた。
- ・ 健脚は脅威。自分は伊能ウォーカーも参加する勇気がなかつた。
- ・ 夢は持ち続けてこそ実現するんだと聞いたことがあるが再び納得。
- ・ 測量のやり方が詳しく説明されており、どうして、どの様なやり方で、と自分が疑問に思う事は全て答えがあつた。
- ・ 年を取ればとるほど、やる気がなくなるが目が覚めた。

・ リポーターが島を測つていい映像は大変さが伝わって良かった。
・ 高校生の頃、難しい名前の日本地図を作つたと一行書いてあり、どうやつて作つたかと一秒ぐらい思つたが、とにかく授業が進むので忘れてしまつた。
・ 喜んでいたと言つ最後の墓の所で、苦しんで測つていたのではないという事がわかり嬉しかつた。

・ 只の測量士だと思つていて。
・ チームで成し遂げる、自分の手柄としないと言う考えは、政治家にも見習つて欲しい。

・ 地図を作つた人という以外何もしらなかつた。
・ びか一は原寸大の地図。

・ 自身の地図に対する思いを綴つた文章があつたらよいなと思いまし
た。

- ・ 伊能ウォーカーをテレビでみて、参加しようと思いつつ、実現しなかつた。今日は自分も参加している気分。
- ・ 具体的にどうすばらしいのか、当時の世界の地図がどうなのかも知りたかった。
- ・ 某新聞社主催の伊能ウォーカーが一ヶ所挿入されていて、放送の公平さを感じた。
- ・ 伊能のキャラはびたりだつた。おじいさんというより、青年としてみた。
- ・ 星が関係したとは知らなかつた。東京博物館の展示会で先に知つていれば見ていたのに。
- ・ 雨の日はどうしたのだろうか。
- ・ 日本のレオナルドダビンチ。ダビンチの天才性のかわりに忠敬には心があつた。

お知らせ等

一、九州伊能忠敬展が終了しました。担当幹事として、大変な御尽力をいただいた九州の古賀方子さん、ありがとうございました。厚く御礼を申し上げます。

九八年に開かれた江戸東京博物館の「伊能忠敬展」と較べると予算は遙かに少ないので、内容は半分以上だったと思っています。

主催していただいた北九州市立歴史博物館、朝日新聞社西部本社ならびに出演の伊能忠敬記念館、伊能家、東京国立博物館、藤岡家、徳島大学、松浦史料博物館、豊津高等学校など関係者のご努力に対し心から御礼を申し上げます。

古賀さんは、伊能忠敬研究会の九州展担当幹事として「九州伊能忠敬展」事務局の構成員でしたが、残務整理終了とともに解嘱となります。

二、新たに北九州市小倉の常盤橋近くに忠敬の測量記念碑を作ろうという話しが出ております。忠敬は第一次九州測量のとき、下関から船で小倉に上陸しました。準備ののち、常盤橋近くに第一の杭を打つて九州測量の基点としています。その地点を画定し、記念として小倉地区の第0番の一級基準点に設定しようという案です。

第一番は、すでにあるから、0番というわけですが、測量の基準となる一級基準点ということは、生きて使われる記念碑になるわけで画期的なモニュメントといえるでしょう。

北九州の測量会社社長で会員の熊谷要平氏の発案ですが、設置と用地の内諾を得て募金の運びとなりました。会員の村井純孝さんが北九州測量協会名誉会長として実行委員長、熊谷要平さんが事務局長に就任予定です。本会も参加することになりました。

三、事務局幹事、編集幹事の委嘱

事務局で定期的にお手伝い頂いている加藤さん（総務担当）、山本さん（かわら版編集）坂本さん（入力および資料室ホームページ担当）の三氏を事務局幹事に委嘱します。

また、これまでも編集の作業に御協力いただいている岡部孝子さんに、改めて編集幹事を委嘱します。

原稿提出方法についてのお願い

まず、原稿はなるべくパソコン出力による入稿とし、ワインドウズのテキスト・ファイルを添付していただくようお願いします。ワープロの場合も必ずフロッピーを添付していただくようお願いします。ワープロの場合は、外注して変換しなければなりません。なるべく、パソコンのワインドウズでお願いします。インターネットによる入稿は大歓迎です。メールアドレスは次ぎのとおりです。添付ファイルで入稿してください。ただし、出力原稿を郵送またはFAXして下さるようお願いします。 watanabe@ss.jj4u.or.jp

校正は、著者において出力原稿とデータ間の校正を完全におこなって下さい。編集部では配列形式の確認はしますが、文字校正は原則としておこないません。また、後述のボランティア入力採用にともない、著者校正は原則として廃止します。と申しましても、パソコンが御理解な方は無理をしなくて結構です。できましたらというお願いです。つきに、ワインドウズのワードバージョンをお持ちの方で、入力に御協力いただける方を募集します。手書き原稿分を事務局よりFAXでお送りし、FDまたはインターネットでフォーマットをお送りしますので、上書きをしていただければ結構です。タイトル、ヘッダなどの形式整理は編集部でおこないます。

伊能忠敬研究会御案内

「、本会は伊能忠敬に関心をお持ちの方はどうなたでも入会できます。
」、「つぎのような活動をおこなっております。

- ①会報の発行
発表誌 年三回以上、交流誌 年三回以上
- ②発表会・見学会の開催
- ③忠敬関連イベントの主催または共催
- ④その他付帯する事業

入会方法等

入会を希望される方は、郵便振替の送金者氏名欄に住所、氏名、電話番号、FAX番号などを明記し、通信欄には専門分野、趣味分野、入会の動機、本会に対する希望など御意見を書き添えて、入会金四千円、年会費六千円、合計一万円を左記にお送り下さい。
会計年度は、四月から三月ですが、年度途中より御入会の場合は、当該年度のバツクナンバーをすべてお送りします。

送金先 (室番が六一八に変更。乞御注意)

〒162 東京都新宿区下宮比町二の二八の六一八

伊能忠敬研究会

郵便振替口座 〇〇一五〇一六一〇七一八六一〇

投稿規定

会員は発表誌、交流誌に投稿することができます。一回の掲載は原則として四頁です。越える場合は分載または、間隔をおいて掲載します。提出原稿は返却しません。採否は編集部に一任して下さい。原稿の状況はお問い合わせにお答えします。

一頁は一段組31字×26行、三段組20字×30行です。タイトルは五行分とします。写真、図表は大きさを考慮して下さい。

伊能忠敬研究会のホームページ

伊能忠敬研究会のホームページは一つあります。一般情報は大友常任理事の担当です。URLはつぎのとおりです。

<http://www.2s.biglobe.ne.jp/~auto/inoh.html>

史料情報については、「伊能忠敬研究会資料室」として坂本幹事が担当しています。現存する伊能図の所在一覧、伊能忠敬関連史料リストなどが御覧いただけます。もちろん両者はリンクしています。

編集担当

本誌の編集は、つぎの編集委員ならびに編集幹事が担当しています。芳賀啓（柏書房社長）、安藤由紀子（元国会図書館勤務）、伊能陽子（伊能洋氏夫人）、岡部孝子、渡辺一郎（代表理事）

編集後記

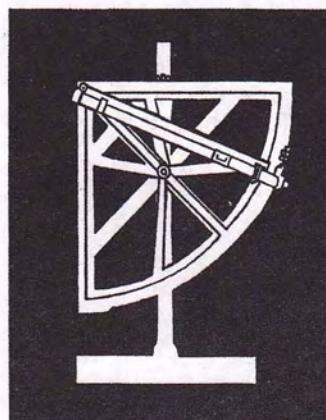
本号から、経費を節減して、発行回数、発行頁数の増加をはかり、併せてイベント等その他経費捻出のため、人力と版下制作を会員のボランティア協力でおこなうことにしました。ちなみに、現在は発表誌一回の発行に約三〇万円かかっており、会費の殆どが会報代となっています。製版方法の改善で、費用は二分の一以下となる見込みです。御協力をお願ひします。

パソコンが便利になつて、このような版下が楽にできるようになりました。一〇万円のパソコンで、ワープロ機能は完備しホームページを覗き、メールを送ることができます。考えようによつては、これほど安いものはありません。ワープロは早晚消えるでしょう。パソコンをやらない場合の情報格差が広がります。無駄口でござ免なさい。（渡）

THE INOH TADATAKA JOURNAL

STUDIES OF INOH'S MAP AND WRITINGS

No.24 2000



ESSEYS

NHK [New year's Historical Play]	
40,000,000 steps Walker INOH Tadataka	WATANABE Ichiro 1
Letter from Mr. SAKABE Tebei	Ioh Yoko 12

MATERIALS

Survey of INOH along the Bo-So coast (2)	WATANABE Takao 6
Reading Document in Sawara 6	KOJIMA Kazuhito 15
Letter of EGAWA and Surveying in IZU (3)	NAKADA Masayuki 20

STUDY NOTE

Pictures of Survey at Ezo area	ASAI Kyoko 25
--------------------------------	---------------

REPORT

Kyusyu INOH TADATAKA Exhibition conclude	26
Diary of INOH in Edo (4)	SAKUMA Tatsuo 27

OTHENNEWS

Edited and Published
by
THE INOH TADATAKA SOCIETY